



読書活動の推進について

12月に入りました。12月は「師走（師走）」と言われるように、何かと気ぜわしい時期です。この語源は、普段落ち着いている僧侶でさえ走り回るくらい忙しい月、という説がよく語られます。これは俗説だとされていますが、1年の終わりに近づいてきたことは間違いありません。

さて、先日の学校運営協議会で「読書活動」についての話が出ました。委員さんの中に、図書ボランティアの方がいます。図書ボランティアの皆さんの活動（毎週の読み聞かせや図書の修繕、貸出返却等）は、約20年ぐらい続いているそうです。（随時ボランティア活動に参加いただける方を募集していますので、お気軽に学校までお問い合わせください。）



山崎小学校では、各学級で毎週1回授業時間中に図書室へ行って、本を読んだり本を借りたりしています。昼休みには、図書委員さんが本の貸し出しをしてくれています。そして、岩出図書館の司書さんも、週に1度来校して子どもたちに読み聞かせやポップ作りなど工夫して読書活動の推進に取り組んでいただいています。

全国学校図書館協議会が毎年行っている「学校読書調査」によると、全国の小学4年生から6年生の1か月に読んだ本の冊数は、2023年6月の調査では、小学生の平均は12.6冊で、10年前の2013年の10.1冊と比べると2冊余り増えていて増加傾向にあります。

子どもたちの読書量が増加傾向にあることについて全国学校図書館協議会は、乳幼児期からの読み聞かせや読書体験などのほか、お気に入りの本の魅力をゲーム感覚で言い合う書評合戦（ビブリオバトル）など、読書に興味を持てる取り組みが増えていることなどが効果を生んでいる可能性を指摘しています。

また、読まれている本の種類については長編の本が減って時間がかからない本がよく読まれているとしていて、「気軽に読める本に興味関心が移っていると捉えることができる」と分析されました。

学校では、国語の物語文の学習の時に、同じ作者の作品を集めて並行読書に取り組んだり、自分のお気に入りの本の紹介をしたり、様々な取り組みをしています。司書さんもいろいろなジャンルの本に触れられるよう、読書ビンゴをしてくれたりして、本に触れる機会を作っています。

一方で文化庁の調査では大人の読書離れが浮き彫りとなりました。2024年1月から3月にかけて全国の16歳以上の6000人に調査し、3559人から回答を得ました。この中

で、1か月に読む電子書籍を含む本の数を尋ねたところ、1冊も「読まない」と答えた人の割合は62.6%にのぼりました。前回5年前の47.3%から15ポイント余り増えて過去最高となり、ほぼ3人に2人が本を読まない、【読書離れ】が進んでいることがわかりました。

また、本を読んでいると答えた人を含めても読書量が「減っている」と答えた割合は、69.1%にのぼり、こちらも過去最高となりました。要因は、「スマートフォンの利用が増えていることや、書店の減少で本を手にする機会が減ってきていることも影響し、読書離れが進んでいると推測される。

「なぜ働いていると本が読めなくなるのか」の著者、三宅香帆さんは「読書で得られるような自分に関係ない情報を『ノイズ』として感じてしまう社会になっている」と指摘しています。

私自身は、定期購読している教育雑誌とあと2冊（とても薄い）毎月届きます。時々までというより、気になるところを斜め読みしています。ジャンルも偏り小説などは最近読んでいないなあ、と改めて感じます。

こうした読書離れによって今は自分好みでないものを除去していく社会になっていくと、自分に関係がない、想像ができないものをどうやって受け入れたらいいのか考えられず、自分以外のものへの想像力がすごく減っていくのではと思います。読書は他人の声を聞くことだと思います。



生涯にわたって本（活字）に親しめるよう、子どもたちはもちろん、保護者の皆さんも、まずは本を手にとって、気になる一行を探すなど自由に読み始めませんか。岩出図書館をはじめ各地の図書館も様変わりしています。もうすぐ年末年始、ゆったり自分のペースで読み進めてみるのもいいですね。

「あい」のある学校の風景



【授業参観】



【避難所開設初動訓練】



【ミシンボランティア 5年】



【要請訪問】



【芸術鑑賞】



【マラソン大会】